

『吉祥天女』[全2巻]

吉田秋生著／小学館文庫

「女であるということが時々どれほどの屈辱をもたらすか、あなたたち男にはわからないでしょう」この名セリフとともに1980年代に一世を風靡し、大賞を受賞し、映画やドラマにもなった作品である。この物語の主人公小夜子は女系の旧家令嬢で類まれな美貌の持ち主である。まだ高校生であるが、刃物のように伶俐で家の財産を狙う男たちには容赦ない。それでいて、心に傷をもった女子高校生にはこの上なく優しい。主人公を取り巻く男たちは次々と謎の死を遂げ、物語のところどころでそれらが小夜子による殺害であることが示唆されるが、最後まで真相は明らかにならない。一見ミステリー小説のようではあるが、読者が殺人犯にたどりつくまでの面白さが目的ではなく、作者の意図するところは、もっと別のところにあるように思う。それはこんな場面からわかる。小夜子にプライドを傷つけられた男が性的暴力による復讐を企てている。それを知った別の男はこんなセリフを語る。「オレはつくづく女に生まれなくてよかったと思うね。本来、こうあるべきだと思う相手から突然反撃されると、そんなに腹の立つものかね？」実は、冒頭のセリフとこのセリフの二つが、この作品が女性の圧倒的的支持を受けた理由なのである。前者はすべての女が経験しながらも言語にすることが難しかったセリフ、後者は男の本音はこういうものなのだと女たちが信じているセリフだ。作者はこの二つのセリフを登場人物に言わせたいために、この作品を書いたのではないかと思う。

セクハラという言葉が日本社会に登場して25年たった。25年前というと、ちょうど本作品が出版された年である。片仮名でセクハラと書くといかにも軽い印象になってしまうが、本質は性差による人格の愚弄と否定である。日本がこの点において最も遅れを取っている国であることは、男女参画共同という用語が存在することからもわかる。「女性が輝く社会」に至っては噴飯ものだ。25年を経ても、社会における性意識は微塵も変わることなく、昨年も都議会におけるセクハラヤジが問題になった。「これぐらいはユーモアの範疇だ」「この程度で目くじらを立てるのは」と弁護するように男性の意識はまったく変化おらず、女性の意識だけが変化した。ジェンダー研究の牟田和恵氏は、男性の無神経さは「地位のある中高年男性に構造的にビルトインされたもの」とであると述べている。都議会のヤジ

場面で被害者の議員は笑って受け流そうとしたが、このように相手のメンツに配慮し、その場を丸く収めようとするのは、男性社会で働く女性が身につけてきた悲しい処世術であると牟田和恵氏は述べている。そして、男はメンツをたててもらっていることに気付かず、「こうあるべきだと思う相手（女）から突然反撃されると」逆上し、持てる全権力を行使して相手を潰そうとするものである。そのような経験は働く女性ならば誰でも経験をしているので、身の処し方を知っている。例えば、媚を売り、愛嬌を振りまく方法。弱いことを演出し同情を買う方法もある。この2つを併せ持つのが、評論家メイ・ロマ氏の言ういわゆる「ヲタサーの姫」（「世界のどこでも生きられる」）である。「ヲタサーの姫」とは、そこそこ頭は良く、仕事に対して有能でも「一緒に仕事できて、嬉しいです」と控えめで、男性の存在を脅かさない。基本的に服装はダサく、ぽっちゃり体型で、決して美人ではないのに（あるいは美人ではないがために）女性慣れしていない日本のエリート男性に最も好まれると言う。弱さをアピールして生きていくという点では、「注射アイドル」というのが最近登場したが、舞台上で注射を打たれ泣き顔を見せるというものだ。彼女たちいわく「可愛いと思われたい」のだそうで、ここまで来ると世も末だ。

小夜子はすらりとした美女であり、頭脳も明晰で近寄りやすい。媚も売らずヲタサーの姫にもならず、生きるために「闘う」という方法を取った。闘えばその先には手ひどい敗北しかなくても、小夜子の誇り高さは闘うことしか選ばなかった。80年代にもヲタサーの姫はいたと思うが、当時の女性は闘う小夜子を支持したのだろう。それにしても小夜子が次々と男たちをやり込めていく姿は、読んでいて決して痛快なものではなく、おどろおどろしい怨念を感じ後味が悪い。評論家の呉智英氏は本作品を「虚しさと浄化」と要約しているが、浄化というものを私自身はまったく感じなかった。小夜子は最後には打ちのめされ、結末の見えない暗黒の物語になっているが、小夜子ほどの知恵者であれば、もっと胸のすくような勝ち方ができるだろうにと思ってしまう。いや、まてまて。女が本気で闘いを挑んだら、空恐ろしいものになることを作者は暗示したのかもしれない。

執筆者紹介

柴崎 秀子

基盤共通教育部教授。専門領域は、第二言語習得研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『吉祥天女 [全2巻]』 吉田秋生著 小学館 (小学館文庫) 1995年 627-648円

[ブックガイド目次へ](#)